愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第30巻　第1号　55～64　1997

万葉仮名「末」の字体をめぐって

佐　藤　栄　作
（国語学研究室）

はじめに

「末廣」を，「未廣」と書くことと「末広」と書くことを比べてみる。前者は誤りとされるが，後者は誤りとはされにくい。その理由は，「末」と「未」が別字であるのに対し，「廣」と「広」は同字の異字体－「異体字」とされるからである。「廣」こだわり，「広」と書かれることを快しとしない「末廣さん」も確かに存在するが，前者は字の違い，後者は字体の違いであって，両者が質的に異なることそれ自体を否定する人はまずいないのではなかろうか。このことは，視覚的・図形的な差の大小によって，別字か同字が決定するものではないことを示している。「末」と「未」との違いは，２本の横棒のどちらが長いか，という微妙なものであるが，その違いによって２字は別字とされる。すなわち，横棒の相対的長短が，字の区別に働いている（弁別的特徴となっている）のである。

姿形は漢字であっても，義を捨てて専ら日本語の音韻を表す文字である「万葉仮名（真仮名）」においてはどうであろう。「末」は／マ／を表し，「未」は／ミ（乙）／を表す万葉仮名として用いられているから，万葉仮名においても「末」と「未」とを取り違えることはできない。しかしその一方で「万」「麻」も／マ／を表す万葉仮名であり，同語が「末」で書かれたり，「万」や「麻」で書かれたりすることがある。すなわち置き換え可能である。もちろん漢字としては「末」「万」「麻」は別字であるから，万葉仮名という用法において，別字が同字異字体の如くに働く－ということができる。漢字と万葉仮名とでは，張り合いの関係が異なるのである。

張り合い関係が異なるとは，文字の集合の要素が異なることであり，漢字内部に，新たな文字体系が生じてくることである。カタカナ，ヒラガナの成立は，漢字と仮名という用法の違いが，形状の違いを生み出すことである。用法の違いに加えて，漢字の形状のシステム（字体の体系）とは別の形状のシステムが確立することで，名実ともにカナが完成したといえる。同一音韻に対応しながら，いわゆる字母の異なるカナ群は，後世新たな用法や機能を付加されることもあるが，やはり異体関係にあるといいうると考える。

漢字から万葉仮名へ，万葉仮名からカナへという流れは上記の通りであるが，事態を複雑にするのは，カナが成立して以降も，漢字，万葉仮名が存在し続けることである。特に万葉仮名が単なる過渡的様態として，カナ成立とともに消え去らなかったことで，万葉仮名そのものの位置づけが必要となった。万葉仮名とは，用法の限定された漢字なのか，漢字とは別の文字体系であると認められるのか。

1

万葉仮名「末」「未」「米」は，度々互いに誤写される。形状の類似が第一の原因であろう。楷書ならまだしも，行書になると，3者の字形は極めて似通ってくる。その事情は漢字においても同様であろうが，義が頼りとならない万葉仮名では，例えば未知の語や語形のあやふやな語については，漢字以上に混乱することが予想できる（3字ともマ行音の仮名である）。短絡的かもしれないが，字全体を草化してできたヒラガナの字母として「末」しか残っていないことは，そうした事情の反映であるかもしれない（代表的な草仮名資料である『秋萩帖』にも，異体仮名の極めて多い元永本『古今和歌集』にも「未」「米」を字母とする／ミ／，／メ／は見えないのである）。[注1] おおざっぱにいえば，草化仮名（ヒラガナ）の流れの中では，「末」が／マ／の中核を占めたために，草化すると字形が極めて似かよる「未」「米」は／ミ／，／メ／の代表としての位置につくことがかなわなかったと。甲類乙類の問題，それに繋がる使用頻度の多寡を背後にかかえ，「末」が先に陣取ってしまったことが影響したとの仮説を立ててみたい。

一方，省文仮名（カタカナ）の流れの方であるが，築島1986によれば，「未」「米」を用いた訓点資料がわずかではあるが存在する。[注2] これは，「末」以上に「万」が／マ／に用いられていること，「末」の略体として1，2画のみ（横棒2本のみ）のものが早くに登場し広がったこと等との関連が考えられる。また草化仮名ほど「米」の形状が「末」「未」に接近するわけではない。しかし，「未」「米」の少なさの方に目を向けるべきである。「末」と「未」とが共存する資料は，築島1986においても，わずかに『悉曇章』（10世紀初頭書写）があるにすぎない。そうした傾向を反映してか，かなり早い時期のものに，すでに第2画の方が第1画より長い「末」が見いだせるのである。そして，結局カタカナにおいても，「未」「米」を字母とするものは残らなかった。[注3]

2

「末」の草体が「未」（「米」）の草体と張り合った形跡が認められないということは，「末」の横棒2本の相対的長短は，草化する当初から他の仮名（万葉仮名，草仮名）との弁別に機能していないことになる。上が相対長，下が相対短の漢字を字母として持ちながら，横棒2本の長さは問題とならないかたちで草化が始まったのである。現代のヒラガナ「ま」がそうであるように，平安時代の草仮名や女手も，横棒2本の長さは字体のレベルではなく，実現形（字形）レベルの事象であったと考えられ，実際に，第2画が第1画と同じくらいの長さの例や第2画の方が長い例が早くから見られるのである。

「末」の1，2画目のみを残した／マ／の省文仮名（カタカナ）において，第1画相対長，第2画相対短が厳然と守られるのは，出発時点では「末」への回帰（連想）のためであったろうが，その後は「ニ」との張り合いに重心は移動したと考えられる。／ニ／が「ニ」でなければ，カタカナ／マ／においてもヒラガナ同様，2本の長短は問題とならなくなっていたにちがいない。[注4]

すでに触れたように，カナが登場して後の万葉仮名の字体をどうとらえるかが問題となる。平安朝以降においても，神楽歌・催馬楽等の歌謡や宣命は万葉仮名で書かれ，辞書や音義書の和訓も万葉仮名が用いられている。

漢字とは別個の文字体系の成立を，ヒラガナ，カタカナの成立まで待つならば，万葉仮名（草仮名も）は，依然として漢字の一用法となり，字体は漢字の字体そのものということになる。一方万葉仮名という文字体系を認めるならば，その文字体系の要素（万葉仮名として用いられる漢字）の張り合いだけを考慮した，形状のシステム（字体の体系）が想定できることになる。しかし，万葉仮名として用いられる漢字の数は，漢字全体からすれば極めて少数であり，そこに別の形状のシステムが生じたならば，それはやはり要素数の小さい方の体系の形状が簡略化されるという道を進む以外にないように思われる。平安朝以降，万葉仮名「末」が極めて少数であることを述べたが，例えば，漢字としての「末」は，「未」との区別のために第１画が相対長が必須条件となり，万葉仮名としての「末」は，「未」と区別する必要がないため第１画が第２画より短くてもよい，あるいは同じ長さでよい－というような，いわば二重構造がありうるのだろうか。

3

漢字の「末」と「未」とが横棒の長短で区別されるというのは確かであるが，実際に書かれる漢字の実現形はそれほど厳密なものではない。形状の類似した漢字でも，漢字は意味を担っているため，文脈を手がかりにそれとわかる。その分，書かれた字の形状はある種の融通性を獲得することとなる。行書等において，形状の上で全く区別のつかなくなる別字が存在しうるのである。[注5]「末」と「未」においても当てはまる。例えば，「末」と「未」を入れかえると別語となる二字の漢字熟語（「○末」と「○未」，「未○」と「未○」）は容易には見い出せない。既知の語であれば，入れかわっていてもそれが誤りだと分かり，コミュニケーション上致命的なミスにはならない。つまり，実は漢字の「末」と「未」こそ，形状にゆれが生じる可能性を持っているのである。

また，すでに佐藤1996で述べたように，「点画の長短」が弁別的に働いている漢字のペア自体，実は極めて珍しい。点画の長さが変わることで別字になる漢字は，筆者の内省においては「末」「未」の他には「土」「士」，「日」「曰」しかない。平均的な日本人ならばおそらく同様であろう。例えば「三」について，第２画を最も短く，第３画を最も長く書くことが多く，それが正しく，そうでなければ誤りとさえ考えられている（教えられている）が，それ以外の，例えば３本同じ長さとか，第１画が一番長いとか，そうした字体の漢字は存在しない。「三」の実現形が，横棒３本が上から順に中短長で安定しているとしても，「三」の字体が／ヨコ３本，上から順に中短長／であるとは言い切れない。[注6] 字体は／ヨコ３本／であって，長さがそのように実現することは，字のバランスあるいは楷書体の特徴といった「実現規則」として字体とは異なるレベルとして扱う立場も有力であると考える。そのような立場からすれば，「末」と「未」とが別字として成立したことが不思議でさえある。[注7] 佐藤1996で述べたように，楷書体には（行書体もか）「連続するヨコ２本は下の方が相対長として実現する」という書体としての特徴が認められるようで，それに反するものは極めて少数である。すなわち，／ヨコ２本／は〔二〕で実現するものであって，〔末〕のような実現形は特異形である。〔未〕は無標，〔末〕は有標といえるかもしれない。ならば，「末」と「未」の字体は，横棒２本の／上が長（下が短）／と／上が短（下が長）／で張り合っているとするのが穏当だが，／上が長のヨコ２本／とただの／ヨコ２本／の張り合いともとらえられる。ただの（無標の）横棒２本が「未」で，特別の（有標の）横棒２本が「末」と言い換えることもできよう。

先に，「末」と「未」とが混同しても文脈の支えなどによって理解可能であると述べたが，「末」の実現形が「未」の実現形にすりよることと，その逆とを想定する時，それは対等であるのかもしれないが，ただの／ヨコ２本／は，下が相対長で実現することを考慮に入れれば，「末」の実現形が「未」に近づく（同一化する）傾向の方が強く出ると予想される。「末」も「未」も，実現形が〔未〕のようになるのではないか。逆にいえば，実際の実現形のゆれにそのような傾向が認められれば，筆者のいう／ヨコ２本／の「実現規則」が証明されたことになるというべきか。

4

万葉仮名の「末」に戻ってまとめてみる。

①万葉仮名「末」の字母である漢字「末」の字体は／上が長のヨコ２本＋～／

②ただし，単に／ヨコ２本＋～／となっても，文脈等から「末」と判断できなくはないので，そのようなゆれがありうる。

③万葉仮名「未」は使用されることが稀となるため，万葉仮名という文字体系内では，万葉仮名「末」の字体は，単に／ヨコ２本＋～／で可。

以上から，「未」を要素として持たない万葉仮名文字体系における万葉仮名「末」には，〔未〕のように第１画が相対短で実現することをそそのかす要因がそろっているのである。

以下，主に『和名類聚抄』（以下『和名抄』）を対象として，万葉仮名「末」の実態を見ていくことにする。『和名抄』を採り上げたのは，①漢字と万葉仮名が共存する資料であること，②万葉仮名「未」が存在しないこと，[注8] ③筆者が諸伝本の系統について強い興味を持っていること－による。万葉仮名の字体，字形から③が明らかにできるとは考えていないが，転写と字体，字形の関係については，得るところがあると期待したのは確かである。

5

『和名抄』十巻本最古の写本である真福寺本（鎌倉時代書写）[注9] は巻１，２（巻２は途中まで）の零本であるが，そこに万葉仮名「未」は存在しない（／ミ／は全例「美」）。／マ／の万葉仮名は39例認められたが，「末」16例，「万」16例，「麻」７例である。「末」は全例，第２画の方が第１画より長く書かれている。「末」を「未」と誤写したのではなく，すでに述べたように，「末」の字体が／ヨコ２本＋～／であり，「実現規則」にしたがって下が相対長で書かれたものと筆者はとらえたい。ただし，第４，５画はハライではなく点のように書かれており，書体は楷書とは言いがたい。

真福寺本には，残念ながら漢字「末」は見いだせなかったが，漢字「未」は，字音注１例を含めると９例存在する（図表１参照）。

こちらも当然全て，第２画の方が第１画より長く書かれている。①②⑥は双行部分ではないので，万葉仮名とは字の大きさが異なるが，他の６例は字の大きさでは万葉仮名と区別できない。しかし④⑤⑦⑧は第４，５画が左右のハライであり，万葉仮名の「末」が２点で書かれているのと異なる。左右ハライか２点かの違いは，書体や書風のレベルの違いであると予想されるが，ここでは万葉仮名「末」と漢字「未」を区別するのに働いているのかもしれない。それでも③⑨は，字形からそれが万葉仮名「末」であるのか漢字「未」であるのか見分けられないのである。[注10]

このような現象は他でも認められるのであろうか，偶然なのであろうか。あるいは，前段階において，漢字は楷書→左右ハライ，万葉仮名は行書→２点，などと書き分けられていたものの名残なのだろうか。

図表１　真福寺本『和名抄』の「末」

	巻	丁	語	第１，２画	第４，５画	備　　考
①	1	2オ	未詳	下　が　長	左右ハライ	序文，修復部
②	1	2オ	未詳	下　が　長	2点	序文，修復部
③	1	9オ	音未	下が長？	2点	細字双行部分，字音注
④	1	12オ	未詳	下　が　長	左右ハライ	細字双行部分
⑤	1	12ウ	未詳	下　が　長	左右ハライ	細字双行部分
⑥	1	13ウ	未置	下　が　長	2点	本文
⑦	1	19オ	未詳	下が長？虫損	左右ハライ	細字双行部分
⑧	1	25オ	未詳	下　が　長	左右ハライ	細字双行部分
⑨	1	25オ	未詳	下　が　長	2点	細字双行部分

図表２　図書寮本『類聚名義抄』の「末」「未」

仮名「末」	ハライ	2点
上が長い	0	16
どちらともいえない	0	3
下が長い	0	2

漢字「末」	ハライ	2点
上が長い	0	6
どちらともいえない	0	0
下が長い	0	0

漢字「未」	ハライ	2点
上が長い	0	0
どちらともいえない	0	0
下が長い	3	0

数字は例数。漢字「末」「未」は見出し部分のみ。

実は図書寮本『類聚名義抄』（鎌倉初期書写か）[注11] の万葉仮名「末」も，21例全て第４，５画は２点である。一方，第１，２画の長短は，16例が上が長で，下が長は２例にすぎない（３例はほぼ同じ長さ）。上が長が多数であるが，／上が長のヨコ２本／は揺らぎはじめている。驚かされるのは，見出しに用いられた漢字の「末」が６例とも２点であること，そして同じく漢字の「未」が３例とも左右ハライであることである。横棒２本の長短で区別されているのに加えて，点かハライかも違っている。２字の区別を横棒２本だけに担わせずに，よりはっきりさせるために，第４，５画でも差を付けたものだろうか。[注12] 横棒の長短で字を区別することの危うさを示すとともに，先の真福寺本『和名抄』同様，ハライと点とが弁別に働く場合があることを強く示唆している。結果的には，第４，５画が２点であることが「末」の字の目印となっているのである。

『和名抄』20巻本最古の写本である高山寺本（院政期書写）[注13] はどうであろう。高山寺本『和名抄』も巻６～10の零本であり，その大半が地名に関わる。まず，細字双行部分の万葉仮名（一般語彙の和訓と地名の「読み」にあたる部分）を見る。やはり万葉仮名「未」は存在しない。万葉仮名「末」は，第２画が相対長の字形が優勢であるが，およそ半数で，２本の横棒の長短は安定しておらず，字体のレベルでは単なる／ヨコ２本／となっていたと想像される。一方，第４，５画を左右に払っているものはわずか２例にすぎない。点がやや長めのものや２点が連続しているものもあるが，第４，５画は点二つでほぼ安定しているのである（細字以外に対象を広げても地名「志末（志木の誤写，下が長で２点）」が１例加わるのみで，漢字としての例はない）。漢字の「未」は３例で，うち２例はハライである（他に地名「高未（？）」あり）。また「未」を字体部分とする「味」「妹」は全例ハライで，２点は１例も見えない。ちなみに「米」の第４，５画もハライばかりで２点はない。ここでも，ほぼ「末」２点，「未」ハライが守られているのであ

る。「末」以外では「保」「深」等が2点であり，字によって左右ハライと2点とに分かれ，それぞれ安定していたのであろうか。同時代の他の資料を見ていかなければ決定的なことはいえないが，字体レベルに近いと認めざるをえないのである。

6

『和名抄』の伝本の中には，京本と呼ばれる数本がある。東京大学国語研究室蔵本（以下単に京本），東京大学国語研究室蔵小島吾一旧蔵本（以下京一本），前田尊経閣蔵本（以下前田本）の三本である。[注14] 完本は前田本だけで，京本は巻4～6までの零本。京一本は巻7～10までの零本である。三伝本の関係は，高橋1994によれば，京本（江戸前期書写）は，京一本（江戸後期書写），前田本（明治期書写）の三代前の本であり，後の二本は京本の曾孫本ということになる。

三本とも書写された時期が，真福寺本とは大きく隔たっている。漢字，万葉仮名の形状に対する意識にも，当然変化があったはずである。

前田本は，京本の虫損を書き入れるなど，かなり厳密に忠実に写したものであるといえる。字も，声点も，ほぼ完全に一致している。しかし，字形については，京本はかなり楷書的な書体であり，透き写しのような関係が続いたものではない。

何をもって忠実な写しというか。これは極めて大きな問題である。「内容が一致する」「用字が一致する」「書体，書風まで似せる」，書写する者・状況により異なるだろう。筆者は，「準拠本の字体レベルまで写しとる」を一つの基準にできると考える。転写の態度・目的が異なれば，第三者から見た精度に差が生じるが，字体レベルの一致を，忠実な転写であることの目安としたい。ただし，佐藤1992aで述べたように，準拠本の書写者の字体と，転写者の字体とが異なる場合があり，当然，転写者から見た準拠本の字体を，転写者が写しとるしかない。準拠本の書写者にとって単なる筆の勢いだったものが，転写者の目には字体レベルに映ることも想定できる。字体レベルの一致を目安としたいというのは，書風以下の個人的書き癖を意識的に殺し，いわば準拠本の字形レベルまで写しとるケースと，字体レベルまで写し，自分の書き癖には無自覚なケースを分けたいからである。[注15] さらに，同字であれば異体関係にある字を用いてもよしとするケースや文字体系を超えることにも無頓着である（あるいは意図的にそうする）ケースがありうる。

厳密に忠実に転写しても，それが複数の人の手によるとバレるのは，個人的な書き癖が出てしまうからである。例えば，Aの部分では万葉仮名「万」が多用され，Bの部分では同じく「末」が多用されている伝本があるとする。その伝本のAとBとは別筆であるとはいえない。もちろん，最終段階において，字や異体の選択の傾向の異なる複数の者が書写した可能性もなくはないが，準拠本，あるいはその親本，場合によっては原本までさかのぼって，どの段階で生じた異質性，断層なのかにわかには決定しがたいとすべきであろう。ところが，α部分では「万」が総じて縦長く，β部分では皆そうではないというような字形上の差が認められる時，α部分とβ部分とは別筆である可能性が極めて高くなる。転写者の配慮は，そこまで（字形レベルまで）届かない場合が多いと考えるからである。その場合でも，前段階での字形レベルの差を，転写者が字体レベルと受け止めてしまえば，書き分けてしまうケースが出てくる。

京一本と前田本との関係は親子ではなく兄弟に相当するが，見比べると，字形の印象がかなり近いことに気づく。

ただし，万葉仮名「末」についていえば，第1，2画の長短は前田本では上が長いものがかな

り多く，ほぼ半々の京一本とは異なる。特に巻８，９ではそれが顕著である。個々の例を比べても，京一本では下が長なのに前田本では上が長がかなりあるほか，その逆もある。つまり，転写に際して，両本とも（厳密にいえば，少なくともどちらかの本は），横棒２本の長短を配慮すべきポイントとは受け止めていない－字体レベルであるととらえていない可能性が高く，両本から，親本である京本の第１，２画の長短の様子は再現できない。

ところが，第４，５画については，主に巻９，10に，２点で書く例が混じっているが，字形レベルのように見てとれるにもかかわらず，京一本が２点なら前田本も２点，京一本がハライなら前田本もハライという傾向が認められる。前田本の巻４～６を目にしていないので，そちらの裏付けがとれないのではあるが，京一本と前田本との字形上の類似は何を意味するのか。書写時期は前田本の方が後だとされるが，本文の乱れを書写しないまま置いた空白は京一本の方にあり，前田本にはない。つまり，字形の類似は，前田本が京一本を直接写したからではない。おそらく，両本の書写者とも，直接の親本の様相（ハライか２点か）を写しとったためであると推定される。そうであるならば，その点の厳密さ・細かさと，先の横２本の長短についての無頓着さの落差が現代人には理解しがたい。他の字や他の資料についても，類似した事象がないか見ていきたい。本稿で設定した（いわば現代人の）字体レベル，字形レベルが，汎時代的に通用するのかしないのか，字体意識の変化変遷を明らかにする糸口になりうる問題である。

7

江戸時代初期書写の10巻本系の完本として高松宮本『和名抄』がある。[注16] 高松宮本の最大の存在価値は，全和訓の９割近くに声点が差されていることにあるが，ここではやはり万葉仮名「末」について見てみたい。高橋1987によれば，高松宮本は「字体等から，第一冊第二冊・第三冊第五冊・第四冊とそれぞれ別筆であると思われる」とある。高松宮本は十巻五冊であるから，巻１～４と巻５，６，９，10と巻７，８がそれぞれ別人の手によるとするのである。さらに第三冊（巻５，６）と第五冊（巻９，10）も別筆ではないか。例えば「也」の第３画と第１，２画とのバランス等を見ると同筆とは見なしにくい。このような字形レベルの差が，同筆か別筆かを見極めるポイントとなることは先に述べたとおりである。以下ここでは，仮に，第一冊第二冊を書写した者をA，第三冊をB，第四冊をC，第五冊をDとしておく。[注17]

さて万葉仮名「末」であるが，真福寺本のように〔下が相対長で，２点〕で安定しているわけではない。第１，２画については，下が長い方が優勢であるが，上が長や２本同じと見えるものも存在する。第４，５画については，左右ハライが優勢であるが，２点の例も混在している。横２本の長短も，ハライか点かも，他の万葉仮名との区別には働いていないのであるから，これらは字形レベルのゆれとして問題ないように思われる。

ところが，巻別に比較すると次頁のような字形の偏在が現れるのである（図表３）。

Bについては，「末」が数が少ないためはっきりしたことは言えないが，C，Dは明らかに下を相対長とする傾向が強い。特にDでは著しい。問題はAで，巻１（第一冊前半）では１例を除いて皆上が長なのに，巻２（第一冊後半）からは逆に下が長が圧倒的に優勢となる。なぜこのようなことが起きたのか。

準拠本の巻１と巻２との間ですでに差が存在しており，転写者Aがそれを忠実に写したとすれば，このようになるだろう。その場合，横２本の長短を字体の差ととらえたか，字体の差とは認

図表3　高松宮本『和名抄』の万葉仮名「末」

書写者	巻	上が長	同じくらい	下が長
A	1	11	0	1
	2～4	8	1	22
B	5，6	3	2	1
C	7，8	6	2	17
D	9，10	2	5	52
合	計	30	10	93

図表4　伊勢十巻本『和名抄』の万葉仮名「末」

巻	上が長	同じくらい	下が長
3，4	11	2	4
5，6	2	1	3
7，8	3	4	16
合 計	16	7	23

めないが転写の方針が微細な違いまで写しとるであったか，どちらかでなければならない。また，巻1と巻2との間の断絶がどうして生じたのか，どの時点で生じたのか，それを別に考えなければならない。

A自身が断層を作ってしまう可能性はないだろうか。準拠本では上が相対長だったから，そのとおり写しはじめたが，巻2からは自分の書き癖－下が長－となってしまったとする説。もう一つは，準拠本は下が長だったが，万葉仮名「末」は漢字「末（すえ）」なのだから上を長とすべきだと考え，そう書きはじめた。が，準拠本が漢字「未」のように書いているから，ついついAも漢字「未」－すなわち下が長－で書いてしまったというものである。漢字から新たな文字体系が芽生え，確立していくという時代が過ぎ去り，漢字とヒラガナ，カタカナの時代になってしまっていたために，かえって万葉仮名の字体を漢字に引きつけてとらえてしまうようになる－そう考えると，最後の説に肩入れしたくなる。結論を出すのは無理だろうが，せめて伊勢十巻本の巻1，2があれば比較できるのだが，現存していないのが惜しまれる。（→〔校正時点での補足〕）

その伊勢十巻本（室町時代書写）[注18]にも，万葉仮名「末」の字形の偏在が認められる。巻3，4では，上が長が圧倒的優勢なのに，巻5以下では半々くらいになり，巻8では2例を除き，あとの10例は下の方が長い。これも高松宮本に似た現象である。同様に考えたいが，無理だろうか。

おわりに

字体の張り合いというかぎり，体系内のすべての要素について相互の連関をとりあげなければならないはずであるが，[注19]今回はわずかに「末」とその周辺のいくつかを見たにすぎない。また，それぞれの時代の文字体系意識，字体意識を明らかにするには，広範な資料検討が不可欠である。その点でも本稿は問題点の確認と出発に止まっているといえる。また『和名抄』の系統を明らかにする基礎的事項の確認にもなりうると考えるが，大東急本など検討していない伝本も残っている。それらを，それぞれ課題として，次に歩を進めて行きたいが，あるいは本稿を修正する必要も出てくるかもしれない。

依拠文献

1『和名類聚抄古写本声点本本文および索引』（馬渕和夫　風間書房　1973）
2『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社　1976）
3『東京大学国語研究室資料叢書13　和名類聚抄京本　世俗字類抄二巻本』（汲古書院　1985）

4『陽明叢書8　古楽古歌謡集』(思文閣　1978)
5　高松宮本『和名類聚抄』は，宮内庁書陵部蔵のマイクロフィルムからの焼き付け写真によった。マイクロフィルムは巻1の本文9丁裏と10丁表にあたる部分が脱落している。

参考文献

今野真二1995「臨模本における本文転化－書陵部蔵本『遺塵和歌集』の場合－」(『高知大学学術研究報告第44冊　人文科学　分冊』)
佐藤　稔1978「漢字字形の史的把握－「般若心経」による試み－」(『国語学』114 集)
高橋宏幸1987「高松宮御所蔵『和名類聚抄』について」(『国文学論考』23号)
――――1994「倭名類聚抄の声点の系統について－十巻本巻第五・六を中心に－」(『国文学論考』30号)
築島　裕1969『平安時代語新論』(東京大学出版会)
――――1981『日本語の世界5　仮名』(中央公論社)
――――1986『平安時代訓點本論考　ヲコト點圖假名字體表』(汲古書院)
前田富祺1989「『東大寺諷誦文稿』の片仮名の体系－片仮名字体史序説として－」(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜風社)
――――1990「『極楽願往生歌』の片仮名の体系」(『語文』52・53)
山田俊雄1968「漢字字形の史的研究の問題とその一方向」(『国語学』72集)
山内洋一郎1992「文字史上の古筆資料草仮名」(『古代語の構造と展開　継承と展開1』和泉書院)
佐藤栄作1990「カナ字形・字体についての基礎的研究Ⅰ－現代ヒラガナの字形・字体－」(『山手国文論攷』11号)
――――1992a「字形から字体へ－『観智院本類聚名義抄』の「ツ」とそれに付された平声点をてがかりに－」(『辻村敏樹教授古稀記念論文集　日本語史の諸問題』明治書院)
――――1992b「文字・表記（理論・現代)」(『国語学』169 集　平成2，3年度学会展望)
――――1996「漢字字体の「内省報告」のために」(『国語文字史の研究三』和泉書院)

注

注1　築島1981による。また，山内1992の草仮名字母数表にも「未」「米」はない。
2　築島1986所収の資料の中で，「末」を字母とする仮名を有する資料はわずかに8文献（「未」7，略体1)，同じく「米」は18文献（「米」7，略体11）に過ぎない。「未」「米」のままの文献は当然のことながら加点時期が早い。
3　築島1981によれば「平安中期・後期に下ると「末」は姿を消す」「平安後期になると，大体「メ」で統一されて行く」とある。「末」の略体も姿を消すようだ。また「末」の略体としての〔ホ〕がかなり早くからいくつかの文献で見えることも，張り合いの関係からすると注目に値する。横棒1本では，長いも短いもない。また終わりの1画が点であることも興味深い（→5章)。
4　築島1986によれば，『辯中邊論』(954年加点）と『彌勒上生經疏』(平安中期加点）の／マ／に〔ニ〕が確認できる。もちろんそこでは／ニ／は〔ニ〕ではない。
5　佐藤栄作1992b参照。例えば『神楽和琴秘譜』(依拠文献4所収，平安時代書写）には「本」に対する「末」が多数存在するが，第1画と第2画との長短はゆれており，下の方が長い「末」もいくつかある。それらはどう見ても「未」だが，「本」に対するものが「未」であるはずはない。ただし，別字体同字形の問題については書体の問題がどうしても絡んでくる。改めて別稿を成したい。
6　考え方としては山田1968参照。括弧記号の用い方は佐藤栄作1996参照。字を「　」，字体を／　／，字形を〔　〕で示す。音韻も／マ／などとしたので注意。
7　「土」と「士」との張り合いについては，点を打つ「土」が想起される。山田1968に言及あり。
8　字音の注としては「未」が存在する。字音の注に用いられる漢字も，万葉仮名同様義は働いておらず，一般の漢字とは機能が異なる。しかし本稿では，漢字を用いた表音符号と考え，漢字とは別の文字体系（につながるもの）とはしない。

9　依拠文献1によった。
10　字音注の「末」を万葉仮名の方へ引き寄せれば，⑨しか残らないともいえる。
11　依拠文献2によった。
12　注7の「土」と「士」に類似する。山田1968参照。
13　依拠文献1によった。
14　京本は依拠文献1，京一本は依拠文献1と3，前田本は依拠文献1によった。
15　本稿では「臨模本」という術語を用いていない。今野1995によれば「臨模本」は字形・筆致まで写しとろうとするものである（それでも書き手の筆勢，筆使いは窺われる）という。また，字，字体を理解せず，字形のみを真似る転写もあり，字形が近ければ，より厳密であるとはいえないことが分かる。それらについては，今後の課題としたい。
16　依拠文献5によった。高松宮本においては，「妹」のツクリ部分が全て〔末〕になっているなど興味深い事象も多いが，改めて採り上げることにする。
17　高松宮本の漢字「未」は大多数が，下が相対長で書かれているが，巻5，6に限っては上が長い「未」がほとんどである。これも第三冊と第五冊の違いである。これは，ことが漢字だけに，単なるCの書き癖で済ましてはならないように見えるが，今はそのレベルの事象としておく。
18　依拠文献1によった。
19　例えば前田1989，1990はカタカナについてそれを実践している。

高松宮本『和名類聚抄』マイクロフィルムの紙焼き頒布につきましては，宮内庁書陵部の八嶌正治先生にお世話になりました。この場を借りて御礼申しあげます。

〔補足〕　藤田夏紀1995「前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について－伊部の漢字－」（『鎌倉時代語研究』第18輯）は，黒川本の「未」を〔末〕と書いた例（前田本では〔未〕）を，「未」の形状に関わる事象として扱っている。誤写（「末」の字）として排除しなかった点，評価できる。

〔校正時点での補足〕　高松宮本『和名抄』の巻1～4を一筆としたが，現在は巻2だけ別筆ではないかと考えるに至った。本稿の論旨に大きく関わるが，あらためて報告したい。

（1997年4月30日受理）

（参考）
図表5　『和名抄』（十巻本）の「末」「未」の第1，2画

伝本名	万葉仮名「末」			漢字「末」			漢字「未」		
	上長	ほぼ同	下長	上長	ほぼ同	下長	上長	ほぼ同	下長
真福寺本	0	0	16	0	0	0	0	0	8
伊勢十本	16	8	22	4	0	0	4	12	38
高松宮本	30	10	93	6	1	5	9	5	65
京　本	3	3	5	4	0	0	7	13	12
京一本	32	7	34	0	0	1	1	1	20
前田本	71	15	31	4	0	3	2	5	36
高山寺本	27	19	48	0	0	0	0	0	3
図本名義	16	3	2	6	0	0	0	0	3

㈱前田本は巻4～6を含まず。図本名義の漢字は見出し（標出漢字）のみ。字音注の「末」「未」は除く。